

英語教科書の1世紀(1)*

——「英学史」方法論の再考——

中 村 敬

1. 英語教科書の批評

高梨健吉・出来成訓監修『英語教科書名著選集(以下、『選集』)』(全29巻)¹⁾が、1994年に大空社から出版されている。この選集に収められている英語教科書は、パーレーの『萬國史』(1875)から第2次大戦後の1947年に発行された*Jack and Betty*までの18種類に及ぶ代表的英語教科書である。この『選集』には、『英語教科書の歴史と解題(以下、『解題』)』が別巻として付いていて、『選集』には入っていない教科書(たとえば、夏目漱石の*New Century Choice Readers*)の解説まで添えられている。『選集』に収められた18種類の教科書以外に、幕末から明治初頭にかけて私塾で使われた[たとえば、*William Griffis: The First Reader of the New Japan Series*, 1873]無数の教科書があるが、この『選集』を通読すれば、*Jack and Betty*に至るまでの英語教科書史が通観できるのである。しかも、監修者は、英学史の一級の研究者であり、その該博ぶりと研究の手堅さは、別巻の『解題』に何よりも雄弁に語られている。

にもかかわらず、御両所の教科書批評に不満なのは、別巻を何度読み

* Textbooks are an important window into a culture ; more than just books, they are semiofficial statements of exactly what the opinion-forming elite of the culture want the educated youth of that culture to believe to be true about the past and present world.—J. M. Blaut : *The colonizer's model of the world*, Guilford Press, 1993, P. 6. 教科書研究は、この国のアカデミズムにあって、十分な市民権を得ていない。しかしながら、Blautのいう通り、教科書は凡百の書物(や論文)よりはるかに雄弁に、ある文化の状況を伝えてくれるものであり、その文化のエリート(と為政者)達が若い世代にどのような世界認識を期待しているのかを(非)公式に語った言説そのものなのである。この国では、英語教科書もそうだが、「国語」教科書もちゃんとした批評の対象になっていない。

返しても、『選集』でとりあげられている半世紀以上にわたる教科書史が、今日の英語問題とどのようにつながっているのか見えてこないからである。たとえば、パーレーの『万国史』について、監修者はそれが「明治時代に学校教科書として最もよく使用されたものの一つ」で、パーレーは「架空の名前」であって実作者はホーソン（1804-64）であったと述べた上で、「パーレー万国史は少年少女のための世界歴史の教科書である。平易な英語で書かれているが、なかなかの名文であるから、日本でも長いあいだ読まれた。地図挿絵が多くて楽しい読み物となっている」と書いている。ここには図像や後の民族学^{エスノロジー}のもととなった地理の政治性については一言の言及もない。

Parley's *Universal History* (1875, 初版1837) は、本文ほぼ700頁に及ぶ大冊である。ここで扱われている地域は、Asia, Africa, Europe, America, Oceanica (ママ) である。その分量の比較を次に挙げておく――。

地域	ページ数
Asia	107
Africa	30
Europe	381
America	112
Oceanica	37

この数字が語る西洋中心思考は、(アジア、アフリカについて) Education makes no progress, liberty is unknown, truth is little valued, virtue is not prized, and that thing which we call comfort and which makes our homes so dear to us, is not to be found.... while they are destitute of the knowledge of the gospel, they have many false religions. (pp. 130 ~ 131) Africa may be considered as, or on the whole, the least civilized portion of the earth. (p. 139) という他者としてのアジア・アフリカ観を創出し、... although Europe is the smallest of the four quarters of the globe, it has nearly three hundred millions of inhabitants, and is much superior to Asia, Africa, and most parts of America, in civilization. (p. 171) という文明観を臆面もなく語っている。もし、監修者のいう通り、『万国史』が「明治時代に学校教科書として最もよく使われた」ものならば、学習者がここで語られている西洋中心思考に影響を受けなかったはずがない。

実際、西洋を中心とするまなざしと構えは、『万国史』以降一世紀以上を経た今日に至るまで、英語の教科書を通して再生産されている。

このように同一の資料を巡る解釈上の違いは、単なる読みの問題ではなく、英学史の研究方法の違いからくる。その違いは、歴史の記述を一連の「事件」の年代記的叙述と考えるのか、あるいは、「事件」を現在を規定するものとして、つまり「現在史」のひとつまとして考えるのか、という歴史認識の根本的な違いからくる。伝統的な英学史の方法は、前者に依拠するものである。そのような方法論上の問題は、それぞれの教科書の特徴を教育方法論の枠に閉じ込めてしまうことである。現に、『選集』に登場する教科書はそれぞれ教育方法論上のある種の典型を示すものが多い。たとえば、第一期の教科書(1875~1887)の著作者はすべて英語を母語とする人達の手になるもので、時の文部大臣森有禮の指示によって W. Denning が書いた *English Readers* (Series 1~6) を除いて、全て本国からの輸入品である。このことの現代的意味は厳しく問われなければならない²⁾。

第2期(1889~1916)になると著作者が全て日本人となる。ただし、それは英語の母語者が一切関係しなかったということではない。編集のリーダーシップが日本人の手に移ったということである。そのことによって、第1期の場合と教科書の内容がどのように変わったのか、あるいは変わらなかったか——そのこともまた厳しく問われなければならない。しかし、監修者は、『正則文部省英語読本』(1889)や *New English Drill Books* 8 (1907) を、当世風に言えば「オーラル・コミュニケーション」教育を志向した教科書の原型として挙げるのにとどまり、日本人が教科書作成に関ったことの意味については触れてはいない。

第3期(1921~1948)で、津田梅子が作成に携わった *Girls' New Taisho Readers* (Series 1~5) と、戦時中に青木常雄と寺西武夫の手になる『英語—中学校用』がとり挙げられているのは当然だとしても、前者が gender に関わる今日的問題の提起となっていることには触れず、後者については『解題』では、4頁を割いて解説しているが、たとえば「日本は Nippon であり、Japan は出てこない」は、日本国家の英語教育政策イデオロギーが垣間見えてそれなりに貴重な解説だとしても、「良き日本の少年であれ」(32課)を巡って、「“皇国”日本の少年をテーマにしたもの」と規定した上で、「編集者の苦心の作品であろう」と片付け

ているのは、伝統的な教科書批評の限界を示している。

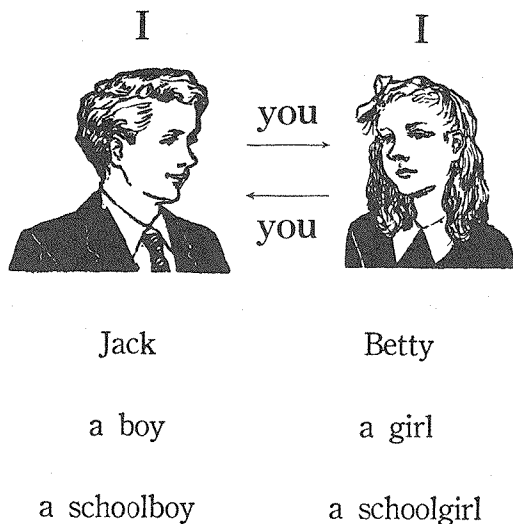
「編集者の苦心の作品」というのは、教科書作成に関わったことのあ
る筆者には、その意味するところがただちに分る。英語教育廃止論が公
然と語られる時代にあって、英語教科書の生き残りをかけた作品の一つ
が「良き日本の少年であれ」(Be a good Japanese Boy! [Book 1, p. 104]) だ
った。しかし、それだけでは編者(青木・寺西)の英語観を十分説明し
たことにならない。実際、敵の言語を教えることと何よりも戦争そのも
のに手を貸していることに「居心地の悪さ」を御両所が感じなかったと
すれば、そこまで英語一辺倒になり得たのは何故であったろうかという
疑問に答えなければならない。そうでなければ、今日の「英語公用語
化」論³⁾が一定の支持を得ている状況や今日の日本人の英語イデオロ
ギーを十分説明できない。『英語』を巡って監修者はいう——、「この国
定ともいうべき英語読本は、パーマー以来の新教授法を採り入れたもの
で、従来の訳読や文法を中心とするリーダーとは趣きを異にする。中に
出てくる軍国的色彩の題材は止むを得ないとして、語彙の厳選、教材の
進度の配列は、よく工夫されている。やがて戦後の英語読本の原型とな
っているのも当然かもしれない」。Limitation と Grading は教材作成の
二大要素であることはいうまでもない。しかし、教科書批評がそこに集
中すること(つまり、英語教育のプロフェッショナリズム)から産み出される
政治的無意識こそが、今日ももっとも厳しく問われなければならないので
ある。「軍国的色彩は止む得ない」と著者達の戦争協力に免罪符を与え
るような言説はきわめて危険だ。

以上みてきたように、年代記的叙述と言語教育の技術上の分析を主体
とする伝統的英学史の方法では、日本における社会問題としての「英語
問題」の歴史的連続性を解明することは不可能であるように思われる。
そこで以下、『選集』の資料を中心にして、どのような方法で教科書を
分析すれば、どのような問題が見えてくるのかを論じたいと思う。

2. 再生産される「植民地主義」

1947年に初版が戦後の英語教育界に送り出され、その後の英語教科書
のモデルとして君臨した *Jack and Betty* については、既に多くの事が語
られ評価は定まったかに見える。『選集』の監修者も、「(16種類のうち、

8割ともいわれる圧倒的多数の中学で採用された *Jack and Betty* は) 新鮮な挿絵と、アメリカ一色に描かれている内容が目をひく。世は憧れのアメリカ時代であり、日本の中学生には同年代の主人公ジャックとベティの活躍を英語によって知ることによってアメリカを肌身に感じさせてくれた」と書いている(『解題』P. 220)。このコメントは、*Jack and Betty* の本質の一部を言い当てている。しかしここでも、その特質がそれ以上の(歴史・社会・文化的)文脈の中で語られることはなく、中心は「構成論」という言語習得論の狭い枠組に閉じ込められてしまっている。実は、この教科書こそ、英語教科書史の1世紀を象徴的に示す作品であるのにもかかわらずである。念のため Jack と Betty が登場する問題の一頁を下記に示す――。



この図像と英語に内在する問題点は、(1)ことば(この場合「英語」)の身体性⁴⁾、(2)場面設定と登場人物の選択における主体性の放棄の2点に尽きる。まず(1)について――。この図像は、英語以外の言語が公教育でほとんど教えられていなかった([中学段階では] 現在でもその状況は本質的に変わらない)時代にあって、①外国人は白人、②白人は英語を話す、という歪んだ意識を刷り込ませる役割を果す。こうした歪みを歪みと感ぜない日本人を創出したことは、*Jack and Betty* に象徴される英語

教科書（1916年発行の *Kanda's Crown Readers* は、*Jack and Betty* と基本的に同じである）の言説がいかに大きな力を発揮してきたかを裏付けるものであろう。英語は文明度と文化度の高い白人種の話す言語という前提は、有色系民族は英語を話さない、話しても「土人」のおぞましい英語を話すという人種差別的なもう一つの前提を創出することになる。こうなると、「白い」「黒い」「黄色い」という身体的特徴が、話される言語の特性をも規定することになるはずだ。つまり、肌の色が独り歩きして、それ自体が力（権力）になるという転倒した状況が生まれる。「白い」は無条件で「正しい」「美しい」「（レベルが）高い」のである。したがって、彼等の話す言語は、「正しく、美しく、そして優秀」なのである。この意識は、（一級とされる）「知識人」から一般大衆に至るまで深く静かに浸透している。

次に(2)について——。*Jack and Betty* の主人公は白人系のアメリカ人であり、物語が展開する場面はアメリカ合衆国である。それを巡って、『選集』の監修者は、「アメリカを肌身を感じさせてくれた」と書いている。*Jack and Betty* が、アメリカを肌で感じさせることができる教材だったとすれば、それはそれでスゴイ教科書だったことになるが、*Jack and Betty* の「効果」はもっと別のところにあったように思われる。一つには、学習者は自分を *Jack* あるいは *Betty* と同一化することにより、閉じられた世界から強大国（占領国）の世界を垣間見てアメリカへの憧憬と嫌悪の二律背反的感情を心に沁み込ませたことであり、もう一つは、英語を学ぶことが一貫してアメリカを知ることであって、日本人の立場から主体的に学ぶという姿勢を学習者から奪ってしまったことである。アメリカを英語を学ぶ場面として設定することは、日米安保に見られるような戦後の日米関係を見事に反映したもので、英語を学ぶためならどんな犠牲を払ってもアメリカに出掛けなければならないと考える人間を産み出した。今日英語テストの世界基準とされる TOEFL⁵⁾ の受験者数が1996年以降1999年迄に（日本人だけで）142万7千人に達する（『毎日新聞』2000年6月10日付朝刊）とされているのも、ここへきて俄かに活発になった「英語公用語化」論もすべて *Jack and Betty* へつながっている。ちなみにこの種の場面設定は、*Prince* に引き継がれた。そして、今日ほとんどすべての場面がアメリカあるいはイギリスというのは、中学校レベルでの典型的教科書では *Columbus* である。パーレーの『萬国

史』以降しばらく続いた英語教科書のアメリカからの直輸入時代と、状況はその本質において何も変わっていないのである。その本質は、支配する側との協同作業によって維持される「植民地主義」である。「植民地主義」は、教育という制度（装置）によってますます強固なものとなって再生産されるのであるが、その効果は継承と連続性という形で今日の世界秩序を形成し維持しているばかりでなく私達の意識をもしばり続けている。そこで以下教科書にみられる「植民地主義」をさらに詳細に検討しておきたい。

3 関係の非相互性：

外国語の教育や習得は、その時代の政治・経済・社会文化（その中には宗教も入る）の状況やイデオロギーと無縁ではあり得ない。英語のような社会的な大言語の教育や習得の場合はなおのことである。英語は、圧倒的な軍勢力、経済力、技術力を背景にし、さらに異教徒と「土人」のキリスト教化と文明化の使命感に燃える宣教師達の進出に伴って、17世紀以降着実に世界に広がったものである。（日本の「近代化」に大きな影響を与えた宣教師の一人が、1871年から1876年まで熊本洋学校の教師・校長として過ごしたL. L. ジョーンズである。）⁶⁾ もちろん、特定言語の拡散は、支配者が一方的に押し付けるだけでは成功しない。やられる側の（生き残りをかけた）協力が不可欠だが、特定言語が大々的に拡散していく場合の基本的な構造は、言語をめぐる関係が本質的に非相互的あるいは非対称的（asymmetrical）だということだろう。R. Phillipson は、英語をめぐる国家間の関係を二分法で説明している（R. Phillipson : *Linguistic Imperialism*, O. U. P., 1992）。つまり、「英語中心国」（core English-speaking countries）と「英語周縁国」（periphery English-countries）である。両者の関係が非相互的であるのは、後者は前者に依存しなければ生き残れないからである。前者は、後者をパートナーとしてではなく、国益を守る単なる「手段」としかみていないからである。国益を守るためなら、自らの戦略（植民地政策）の正当性（legitimacy）を主張するのにいかなる「屁理屈」も平気だった。「文明化の使命」論もその一つだった。

日本人と英語の出会いもまた非相互的だった。1808年のフェートン号事件直後、幕府は長崎の通詞たちに英語の辞書の作成を命じ1814年には

本木正榮を中心とした通詞たちの手になる『諸厄利亜語林大成』が完成する。辞書編纂のために参照できるものといえばオランダ語の辞典しかなかった時代にあつて、しかも6年という短期間で『英和辞書』を完成しなければならなかった事実をみると、当時の政策担当者が世界の状況を的確に捉えていたことが分かる。つまり、イギリス語の背後にある軍事力（と経済力）に日本がとうてい打ちうちできないということを正確に認識していたのである。強力なイギリスに対抗するためには、イギリスから「学ぶ」しかない。その瞬間から英語はイギリス帝国の社会システム、それを支える思想、技術を「学びとる」ための言語となった。「学ぶ」のは日本であつてイギリスではない。このような一方通行の関係はC. ベリーによって「開国」させられた後、「主」がイギリスからアメリカに変わっただけで、いっそう強固になった。そして第二次大戦の敗戦とサンフランシスコ条約（1951）によってほとんど不動のものとなつて今日まで引き継がれている。このように「英語奴隷」の系譜は実に単純明快なのである。

近代文明を「学びとる」手段としての英語習得を制度化したのが学校における英語教育であり、そこでの習得の基準や標準（standard）となつたのが（検定）英語教科書である。「学びとる」「学ばせる」関係の下に使われた英語教科書の特性は、作成者が「学ばせる」側の人間であることだ。それがもっとも顕著に表われているのが、『選集』の第1期分として収録されている全10巻の教科書である。「教科用図書検定条令」は1886年に出されているが、第1期の中で最初の検定教科書となるのは、時の文部大臣森有禮がイギリス人（牧師）のWalter Denningに本文の作成を依頼した *English Readers* (Series 1-6) で、発行元は文部省編輯局である。（ただし、英語教科書史の中での、文部省の手になる検定教科書の第1号は、*The Monbushō Conversational Readers No. 1*, 1987である。）この森の教科書を含め他の教科書の全ての著作者が英語の母語者である。森の意向を受けて日本人向けの英語教科書を書いたWalter Denningは、明治政府が莫大な給料を払って雇つた英語教科書界の「お雇い外国人」の一人であつた⁷⁾。ちなみに、このようなお雇い外国人の戦後版がWilliam Clarkで、彼は *Junior Crown* (1962-72) の本文の全てを執筆した。このDenningの教科書以外のものは〔『選集』に所載されたものに限って言えば〕全てアメリカからの直輸入であつた。パーレーの『萬国史』の

Japan の項（3 頁分）には次のような記述がある——。The Japanese seem to wish, too, to know something of the history of the nations from which they have so long lived apart. For every now and then, the publishers of this little book which you are now studying, receive on order from far off Japan for two, four, six hundred copies of Parley's Universal History. (p. 113)

関係の非相互性は、「学びとる」側が「出超」を覚悟しなければならないのは昔も今も変わらない。もちろん、フルブライトやブリティッシュ・カウンシルによる本国負担での留学制度はある。しかしここでも注意しておくべきことは、そうした制度が、「国益」を第一とする国策（外交政策）の一環として創設されていることだ。戦後一度に200人にも及ぶ留学生をアメリカに送り出したフルブライト制度の下で、多くの英語教員がミシガン大学を筆頭に全米の大学で応用言語学を学んで帰国し、それが10年後の30年代に日本の英語教育界に大きな影響を与えることになったことは知る人ぞ知る事実である。各種の留学制度は、長期的にみればそれぞれの地域での英語教育の振興に貢献し、それはまたまわりまわって英語（教育）関係の出版物の輸出や英語教育技術やそれに伴う機器や人材の輸出につながり、「学ばせる」側に大きな経済効果をもたらすことになる。しかしながら、こうした経済効果以上に重視されなければならないのは、（後で触れることになる）英語教育を通しての学習者の「アメリカ化」「イギリス化」「精神の植民地化」である。

ここで Denning の *English Readers* に触れておかなければならない。理由は、この教科書には、題材をすべて中国と日本に関わるものというきわだった特徴があるからだ。その意図は、今日風の用語で言えば、「発信型」の教科書を目指したからだった。Series の序文には、The object of this Series of Readers is to express in the English language ideas with which the Japanese student is more or less familiar. とある。そのような目的を掲げるのは、The difficulty which the Japanese youth finds in understanding Readers which have been compiled for the use of English or American scholars, is very considerable. だからである。このような教科書の作成を発想したのは既に述べたように森有禮だった。したがって、この教科書の思想は森の思想そのものだったと解してよいだろう。「英米の生徒向けに編集されたリーダーの理解は日本の学習者には難しい」

と考えた森は、その難しさを the subject treated, allusions made, the illustrations employed and the writer's general mode of expressing thought にあると Denning に代弁させている。この教科書の発行は1887年である。実に1世紀以上も前に日本人学習者が日本で英語を習得する上での困難点を的確に指摘している。このことはいくら強調してもし過ぎることはないと思うが、森の指摘にもかかわらず、今日に至っても一向にその点を克服できていない。Denning (したがって、森) のいう allusions made は、伝統文化の継承を「引用」という仕掛け (device) にあることを、自らも密航までして実現したイギリス留学の間に身をもって体験した森ならではの指摘である。この困難点をさらに別のことばで言い換えれば、cultural code の理解がなければ、読解すら難しいのにそれをほっておいて表現力を付けさせるのは無理だということになる。森の目指したのは、デパートでの買物用の「会話力」ではなく、あくまで知的な表現力であったはずだ。現に森の書いた英文のいくつかを読めば、森の英語の表現力のスゴサに脱帽させられるはずだ。森は今日の「帰国子女」でもなく万次郎のような漂流者でもなかった。成人してから自らの意志で英語国に出掛けて英語力を磨いた人間の一人である。森にとっての英語は観念ではなく実体そのものだった。「英米の学習者」用に編まれた教科書は、日本の(日本における)学習者に「観念としての英語」を提供することになっても手応えのある「実体としての英語」にはなり得ない、と森は考えたのではなかったか。「日本人はなぜ英語ができないか」は、依然として学習者の生活とは無縁の素材を提供し続けているからであり、制度としての「全員学習」にあることも明々白々たるものなのに一向に改められない。改められないどころか問題はそこにある、という「共通認識」さえ育っていない。

再び森のテキストに戻る。典型的題材(タイトルは 'The Thing Most to be Feared') の冒頭は次のような文で始まる――。

One night, when Toyotomi Hideyoshi was conversing with his friends, he put the following question to them : —“What is the thing to be most feared?”

Series 1 から 6 まで全ての題材がこの種の“土着性”(vernacularism)

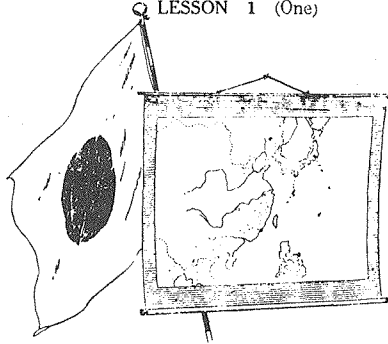
に徹したものだ。しかし、この教科書は「失敗」だった⁸⁾。それについて、『選集』の監修者は、「学生・生徒のよく知っていることが英語になっていれば、英語の学習効果があると考えたのは誤りであった。英語教育はアングロ＝サクソン民族の文化と風物を英語を通して教えるところに価値があることは忘れてはならない」と述べている。森がこの文章を読んだら何というだろうか。森の教科書は、学校という制度の中で（たとえ選ばれた者であれ）学習者全員が強制的に、教室という人工的な場面で使うことを想定して作られたものである。当時と違うところは、「選ばれた者の全員」ではなく、小学校から全入をほぼ保証された形で入学してきた学習者の「全員」が強制的に学習させられている点である。それでも学習者の全員が英語を通して「アングロ＝サクソン民族の文化と風物を学ぶべし」と主張するのは、その必要性が認められないという意味で「实际的」ではなく、（観念としてではなく実体としての）多文化と多言語状況を志向するポスト・コロニアリズムの理論に反するという意味で、「理論的」にも間違っている。漱石は、森の教科書に関し、「語学なればとて只文字上の学のみならず其国語中に出て来る器物の名、人名、家屋道路の景状等も知らざれば其国語より出来る文の利益を取めたりと云ふべからず」と論じているが、監修者はそれを引用しつつ自説の正当性を主張している（『解題』p. 85）。この漱石の主張は、監修者のそれと同様に、全員履修という制度を無視し、英語問題を外国語の「習得理論」という狭い枠の中に閉じ込めた自閉的な英語教育論であって日本人にとっての英語問題の核心を突いていない。非相互的な日本と英・米国の関係を放置しておいて、日本は学習者の全員が相手国の言語を学び、相手国は限られた人間しか日本の言語を学ばないという状況で、学生・生徒の全員がアングロ・サクソン文化や習慣を学んで当然と考えるのは、いくらなんでもノーテンキ過ぎる。国策から決して自由になれない学校の外国語教育は、本質的に政治的な存在なのである。もし、監修者や漱石の主張（それは、この国の大部分の英語教育者の言語イデオロギーである。森の教科書の「失敗」はそれを証明している）に実効性と正当性が与えられるとすれば、それは、公教育の場で様々な言語の習得が保証され、アングロ・サクソン民族の文化や習慣を知りたいと思う学習者（のみ）が集まったクラスの編成が可能になった時である。

以上述べてきたように、第1期の教科書の本文作成者は全て英語の母

語者であるが、第2期(1889～)、第3期(1921～)となると代表著作者は全て日本人となる。この時期になって、日本の英語教育が自律性を獲得したかというそうではない。なるほど代表著作者は日本人にはなったが、「お雇い外国人」は、「校補」(つまり、本文の修正係り)として活躍することになる。『解題』には、『正則文部省英語読本』を出版した大日本図書株式会社の広告の一文——本書は初め外山文学博士の編纂に成り、英人チャンプレンの校補を経たるものである——が引用されている(p. 85)。英語の母語者(場合によっては複数)によって「本文に目を通してもらう」というのは、現在の教科書作りにも綿々と生き続けている伝統である。つまり、教科書作成者の顔は日本人であっても、いわゆる「ネイティブ」という「支配者」が背後にいるのである。これを英語教育における「間接支配」の構造といってよい。「ネイティブ・スピーカー」ということばが日本人にとって一種独得の意味を持っているのはそのためである。その意味は、こと英語の用法の是非については「万能」の力を発揮する存在であり、それ故に高い「文明」と「文化」そのものなのである。なにしろ彼等は、「気前よく支払われ、なかば神のような地位にまで引き上げられ、その発言はオリンボスの神々の知恵のようにあつかわれ」てきたのである。(F. G. ノートヘルファー『アメリカのサムライ』p. 10) インド人の Thomas M. Paikeday が「ネイティヴ・スピーカーは死んだ」(*The Native Speaker is Dead*, Paikeday Publishing Inc., 1985)と叫ぼうと、日本ではその「権力」と「栄光」(prestige)は微動だにしないのである。(なお、native speakerの「他者化性」については、Rajendra Singh (editor): *The Native Speaker*, Sage Publications., 1998を参照のこと。)

英語のネイティブ・スピーカー(つまり、英語一言語主義)の問題を突きつめて考える絶好の機会は、戦時中に“敵の言語”を使って教科書(『英語』1944-1945)を作成した時に訪れた。その First lesson は次のようなイラストと地図を題材にしたものだった。

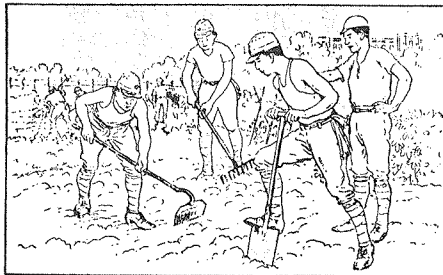
LESSON 1 (One)



This is a map.

This is a flag.

登場人物として Tom と Mary も出てくるが、*Jack and Betty* の Jack と Betty のように中心的役割を果しているわけではない。中心はあくまでも日本人（森の教科書はその第 1 号であり、それは『正則文部省英語読本』Series 1 ~ 5, 1889 に引き継がれる）であり、それも軍人や将来帝国日本を背負う「日本男児」である。たとえば次のイラスト（Lesson13(Book 1)）は当時の時代状況をも写し出している。興味あるのはこうした戦時色の



We are out in the field.

I have a rake.

You have a hoe.

Kimura has a spade.

Now let us work together.

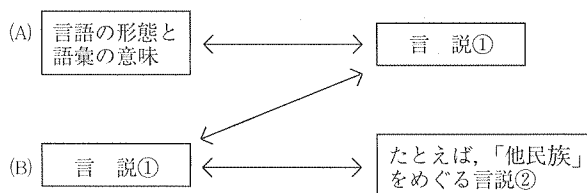
強い教科書にあっても English meals, Christmas (Book 1), The English Countryside, An English Family, How the English People Became Christians, Tales from English History (Book 2), などの課が, Nippon, whose people are the leaders of all the nations in the Greater East Asia, lies in the east of Asia... No country in the world is so strong as Nippon is. (Book 2 Lesson 22) のような国民の戦意を鼓舞する軍国色の極めて濃い文章の中に採り入れられていることだ。この二種類の題材は相互に何の関係性もない。「鬼畜米英」のイデオロギーに徹するのならば、(イギリス人の生活習慣に好意的な) The English Countryside, English meals や An English family などは採り上げるべき題材ではない。またその逆も真なのである。これだけ矛盾した教材を平気で並べられるとすれば著者達はよほど分裂的な精神の持主だったことになるが、筆者の推測では著者達は基本的に Anglicist (岡倉由三郎もその一人で彼は Japan is sometimes called the England of the East. と書かずにはいられなかった [The Globe Readers Book 1]) であって、本音は全ての題材をアングロ・サクソンの風俗習慣・生活様式・風物に関わるものにしかかったのに、国定教科書として検定を通すために、愛国的素材を装いとして中心に据えたのではなかったかと思われる。もしそうなら、この国定教科書『英語』も、パーレーの『万国史』と本質的に変わってはいないことになる。そのような一見精神分裂症的教科書を作成してまでも英語教育のためにガンバルことにはどのような意味があるのだろうか。英語一言語主義 (English monolingualism) を厳しく批判するのは R. Phillipson だが、この『英語』にみられる (他の言語には見向きもしない) 著者達の言語イデオロギーは正に English monolingualism だったと規定できる。

この教科書に英語の母語者の「校補」がいたかどうか、『解題』は触れていない。Book 1 などは明らかに日本人の著者の手になるものであることは一読してすぐ分かる。著者名は青木常雄・寺西武夫とあるだけで、今日のように外国人の名前を併記することは『選集』の第2期以降は原則としてなかったようにみえる。しかしながら、実際には日本人の著者の書いた文がそのまま載るということはなかったであろう。この国定教科書の『英語』の本文の最終校閲を「鬼畜米英」人の一人に依頼することの矛盾もまた著者が向き合わなければなかった問題でもあったはずだが、Anglicist の著作達にとっては問題にもならなかったのだろう

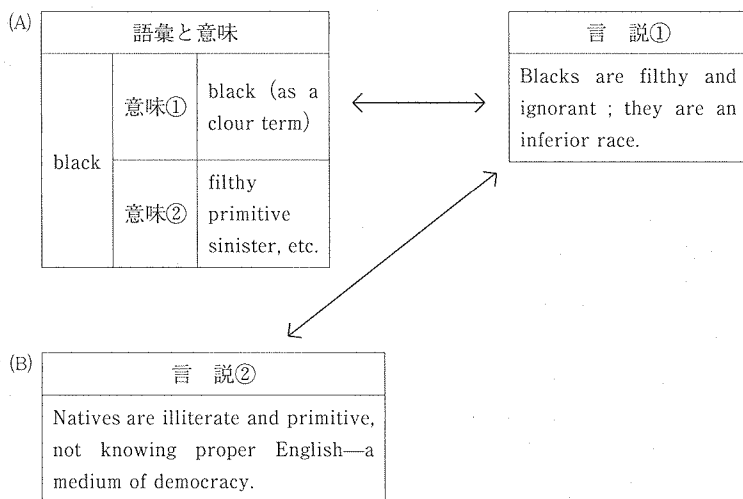
か。近代日本の英語問題の核心は、「ネイティブ・スピーカー」とどう向き合うのかにあった。それは丁度日本人が階層社会の頂点を形成する天皇制とどう向き合うのかという問題と同じ問題を抱えている。第2次大戦の敗戦は天皇制の問題に一つのけじめつける絶好の機会でありながら、日本人はそれを先送り、あるいは「すり抜け」てきた。その結果が今日いわれるような社会の隅々まで及んでいる無責任体制である。日本人にとって、「ネイティブ・スピーカー」の問題は天皇制の問題に擬せられる。隠喩としての「ネイティブ・スピーカー」は天皇なのである。多くの日本人はそのような問題が存在することすら気が付かず、向き合う機会は何度もあったのにもかかわらず、問題が何なのかも気が付かないまま今日に至っている。1955年に書かれた小島信夫の『アメリカン・スクール』（みすず書房）の中の英語教師の英語に対する「劣等感」と「奴隷根性」は、今なお多くの日本人の心の底に、澱のように沈殿している。（「劣等感」を手取り早く克服する方法は、「代償行為」である。近隣諸民族に対する蔑視が、それである。それは丁度白人に劣等感を抱く黒人の「代償行為」が尊大にふるまうことと共通している〔シェルビー・ステイル『黒い憂鬱』p. 116〕）。こうしたことの一切が言語の背後にある国家（あるいは民族）間の非相互関係からくるというのが筆者の仮説だ。そのような関係性の中で作られた英語教科書は、次に述べるような英語イデオロギーが創出する他者観を学習者に刷り込むことになった。

4. 教科書が表象する「他者観」

言説⁹⁾の「相互性」について、A. Pennycook は、double reciproca-
tion 理論を説明の枠組として提出している¹⁰⁾。それを図解すると次のようになる――。



「言説」はまずそれを表出する言語の構造や語彙の意味構造に規定される。その言語の形態や意味構造はそれが産み出した言説によって影響を受けて、固定化したり新しい意味を加えて行くことになる。これが第一の相互性(A)である。その言説は言語の構造や意味の問題とは別に、その時代の文化の問題（例えば、「他者観」）と深く関わって相互に影響し合う。これを第2の相互性(B)とする。第1と第2の相互性はそれぞれ独立していながらさらに相互的關係を切り結んでいる。これを「二重の相互性」(double reciprocation) という。A. Pennycook (*English and the Discourses of Colonialism*) はこの枠組を英語で書かれた植民地言説の分析に適用しているのであるが、かなり有効性が高い。たとえば、*black* をこの枠組で説明すると次のようになる――。



(A)の意味①は denotative meaning, ②は (negative) connotative meaning である。これが長年の間に蓄積されて来た negro (後に black) の意味構造である。Peter Roget's *Thesaurus* (1998) の INDEX の *black* には22の類語が載っているが、明らかに否定的含意を持つ語 (evil, bad, dirty, heinous など) が大部分を占める。それに対して *white* の類語は 5 語 (*colourless, white, eye, clean, pure*)。このような意味の束ができ上ったのは、(B)の社会文化的に創られた「黒人観」が、(A)①の言説を通して *black* に新しい意

味を付け加えてきたからである。要するに、黒人は「黒いから劣等」なのであり、白人は「白いから優秀」なのである。日本人は、まず最初パーレーの『万国史』のような直輸入の教科書を通してアングロ・サクソンの「黒人観」や「土人観」に接した。よほどの批評眼がなければ、問題点に気付けないというほうが無理だ。まして英語の「他者の差異化 (Othering) 性¹¹⁾」「差別性」「政治性」について理解を求めるのはなお無理である。アメリカの民族構成を『万国史』は、先住民のインディアンとヨーロッパからの移住者の二つのグループに大別して「黒人」などは「人間」の範疇に入らなかった。しかも、先住民族については、...the Indians, who were found scattered throughout the American continent when it was first discovered. と主客転倒の「インディアン発見史」が当然のように展開されている (p. 564)。この史観に忠実ならば、次にコロンブスが登場するのは、自然のなりゆきであった。『万国史』はそのために6頁を割いている。このコロンブスは、その後英語教科書に繰り返しとり挙げられてきた。「黒人」については、『万国史』は3頁余を費している。著者は冒頭で I have now a very sad story to tell you.... と述べているところを見ると「奴隷」問題には良心に痛みを感じていたものとみえるが、それはアメリカの民族構成の中に「黒人」を加えなかったことと矛盾する。著者がどんなに奴隷制度の悪を歎いてみせても、「黒人」を「人間」として扱う勇氣はなかったのである¹²⁾。ついでながら、black ということばはこの段階では、未だ登場せず、(African) slave と negro が「黒人」の呼称だった。Mitchell's *New School Geography* (1872) でも合衆国の民族構成の記述は、移住者の記述 (したがって白人中心) が多く、黒人については There are also many negroes. のように negro の呼称で一貫している。negro は今日でも黒人たちにとって「侮蔑的」(offensive) なことばであることは、LDCE (New Edition) の次の説明をみても分かる——, **Black** is the word which is preferred by many black people. **Coloured** and, especially, **Negro** are now considered by many black people to be offensive.

第1期の *Wilson's Readers* (1860) には以下のようなイラストと共に、「黒人 (negro)」の具体的な記述がはじめて登場する——。

LESSON XIII.
MAKING PIES.



(1) Miss Mary has gone to the kitchen to show Susan how to make pies. Do you know which Miss Mary is? What is she doing now? What is she holding in her left hand? What has she in her right hand? What is she cutting off with the knife? She is cutting off some of the dough which the pie-crust is made of.

(2) Is Susan a white woman? Do you think Susan is talking now? Does she look pleased? What do you think she is pleased about? I think she is pleased because Miss Mary has come down to the kitchen to show her how to make pies. Which has the biggest nose, Miss Mary, or Susan? Which has the thickest lips?

(3) Susan says she can make pretty good pies, but she says she thinks Miss Mary can make better pies. Do you see the young girl? Is she a white girl? Does she look any like Susan? Do you suppose she thinks her curls are pretty?

(4) What has Susan on her head? Are her arms as white as Miss Mary's? Is her face as white? Are her hands black? Yes, but they are as clean as they would be if they were white.

(5) What is the boy doing? Has he any cap on his head? What kind of hair has he? Why does he open his mouth so? Can he see any better with his mouth open?

(6) What kind of a pie do you suppose Miss Mary is making? It may be a peach-pie, or a mince-pie, or an apple-pie, or a currant-pie, or some other kind of pie. What kind of a pie do you love best?

(7) What do you see on the table? I see a bottle, with a long neck, and a cork in it; and a jar with a spoon in it. Do you think there is any thing else in the jar?

人間の肌や身体的特徴についての直接的な言及は以後のテキストにはそれ程多くない。その意味では貴重な資料だ。総論的に言えば、視点はあくまで支配者のそれである白人の眼である。第2段落の Does she look pleased? の答えは、イラストを見る限りなんとも答えられないはずだが、次の What do you think she is pleased about? を読むと、答えは “Yes.” を前提にした質問であることが分かる。第3段落の Which has the biggest nose. Miss Mary, or Susan? Which has the thickest lips? は、黒人を見たこともない日本の学習者に、「黒人は鼻が低く口唇は厚い」というステレオタイプ化したイメージを与えただろう。日本の学習者の黒人像は、実体としての黒人像ではなく、白人が自らの視点で書いた言説¹³⁾を記号としてイメージ化したものである。しかも身体的特徴については繰り返し書かれていても、文化的特徴については何一つ書かれていないのである（特に第4段落を見よ）。第5段落での Why does he open his mouth so? Can he see any better with his mouth open? で、この課全体が隠しようもないほどの人種主義的イデオロギーによって書かれていることが明らかになる。言語の身体性については既に若干触れたが、たとえば Betty と Jack をこの課の Susan（黒人女性のこの英語名も問題であることはいうまでもないが）と彼女の息子にそれぞれとり替えることが絶対にできないのは、言語の身体性の本質が人種問題にあるからだ。黒人種は proper English を話せない。話すのは「土人」英語である。何故なら肌が黒く、鼻が低い。唇は厚い。これでは猿だ。猿は人間（白人）の言語を話せない。したがって、黒人はまともな英語は話せない。白人から人間以下と見られてきた黒人が日本の英語教科書に主人公として登場するはずがないのである。コロンブスをとり挙げた *Union Readers* (1863) には、... he (Columbus) has brought home the proofs of his visit, — gold and precious stones, strange plants ; and, above all, specimens of a new race of men, copper-colored, with straight hair. (p. 360) とある。コロンブスがインドから連れてきたとされる「インド人」を巡り、動物図鑑の分類を連想させずにはおかぬ specimens of a new race of men という表現を使っているのは、自と他を峻別する英語の他者化性 (otheringness) を示しているが、黒人についてもまた、身体的特徴を真先にとり挙げて内面をのぞこうとしなかったところに、他者化する英語の特質をみるのである。ついでながら、後述する *National Readers*

(1884) の Book 5 には Washington Irving が書いた “The Discovery of America” が載っている。その一節はこうだ——, The admiral particularly attracted their attention from his commanding height, his air of authority ; his dress of scarlet, and the deference which was paid him by his companions, all of which pointed him out to be commander. When they had still farther recovered from their fears, they approached the Spaniards, touched their beards and examined their hands and faces, admiring their whiteness. (p. 353)。Admiral はコロンブスで *their attention* の *their* は「土人」を指す。「長身」「威厳」「真紅の服」「白い肌」——, こうした記号が「土人」にどのような印象を与えたかを「与えた者」の立場から書いているのである。帝国主義的植民地言説創出のプロセスがこんなにはっきりと示されている例も珍しい。

英語教科書の著者たちは、黒人の身体的特徴には余程興味を持っていたらしく、英語の学習が学習者の道徳性の向上に大いに貢献すると言ってはばからなかった増田藤之助の教科書 *The International Readers* (Series 1-5, 1915) の Book 1 には, Negroes have turned-up noses, and thick lips, and woolly hair. (p. 148) にはじまる描写が出てくる。ここには身体性の問題と共に今日まで引き継がれている問題がある。この課は、主として① English people, ② the Chinese, ③ Negroes の三つのグループが比較されていてタイトルは ‘The Races of Men’ である。このタイトルに従うのなら、①は「イギリス民族」、②は「支那民族」、③は「ニグロ民族」となるはずだが、実際の教室では、①’ イギリス人②’ 支那人③’ ニグロと教えたと思われる。①②は存在しないのであるからこれは明らかな間違い。①’ は、イギリス国民を指しているのなら、ケルト民族をその呼称に勝手に含めて使っていてこれもまた間違いだ。②’ は江戸中期以降第二次大戦末まで用いられた「国民」名である。③’ だけが(蔑称としての) 種族名なのである。negro は、黒人たちに公民権が与えられる前に使われはじめた用語である。したがって種族を示す呼称として使われたのは当然だった。問題はある呼称が一般性を持つ場合、そしてその呼称を付ける側と付けられる側の力関係が対等でない場合、付けられる側が大概差別の対象になることだ。この国の英語の教科書は、英語の母語者が書いたものを基本としてきたのであるから、negro にもアングロサクソンの黒人観がそのまま持ち込まれることになった。その点で

は英語教科書は本質的に人種主義（あるいは、差別）的なのである。

再び増田の本文に戻る。negro の鼻は turned-up だという。turned-up nose から、穴の中が丸見えの猿やゴリラの鼻を連想するのは容易であろう。しかも唇は「厚い」ときている。比較の対象となっている English people や Chinese に対しては背の高さなどを問題にしている、顔の特徴に付いてこうまで執ような記述は一切ない。これは要するに、「見られる者」は「見る者」の基準に従って定義されるということだ。岩竹は、「表象する行為には力関係が潜んでいる。強いものが、弱いものを解釈、描写する場合、後者はたとえ不本意であったとしてもそれを受け入れざるを得ないという状況がある」といった¹⁴⁾。一方、ファノンも、「黒人は言語によって定義される」と考えた¹⁵⁾。英語の教科書は英語によってアングロ・サクソンのまなざしで黒人を（身体的特徴から）定義しているのである。日本人の黒人観は一つにはこうして創られた。Anglicism に徹する *Jack and Betty* や *Kanda's Crown Readers* はそのような黒人観の逆説的表現といってよい。ここで後者の図像の一つを再録しておく。念のために言っておくと、この教科書の場面は基本的にイギリスで、ここに引用する図像は例外的な1枚ではなく、全編にこの手の図像が登場する。いかに著者の神田乃武が「イギリス大好き」であったとしても、イギリス社会の中の一部を形成する支配層に基準をおいた図像の構成はポスト・コロニアリズムの観点からすると許し難いものがある。（この図像と p. 18 の黒人のそれとを比べよ¹⁶⁾。）



自らの眼を通してではなく英語という記号によって前提としての他者観を刷り込まれた日本の学習者は、一方では、英語イデオロギーを自らの倫理観によって読み替えることによって積極的に受け入れたのだった。次にそのことを詳述する。

5. 英語イデオロギーの読み替え：

日本人の倫理観は、キリスト教のように原理や原則にのっとったものではない。それは、筒井清忠が「修養主義」（『日本型「教養」の運命』岩波書店、1995）と呼ぶ求道倫理観を内在した実践的「処世訓」である¹⁷⁾。一方、古川哲史は、日本人の道德観を「全力的」ということばで説明した（『日本の求道心』理想社、1974）。その背後に儒教（具体的には、孔子とその弟子達の言行録である「論語」）と江戸の中期頃から発達し明治以降の日本人を縛り続けてきた「武士道」の影響を読みとることができると思うが、それはここでの問題ではない¹⁸⁾。ここでの問題は、筒井や古川達の説明モデルが、日本人が英語を受け入れる際にどんな働きをしたかである。『解題』の著者は、*National Readers* (Series 1-5, 1883-1884) について、「明治時代に英語教育を受けた者で、本書の恩恵に浴さなかった人はほとんどあるまい」と書き、この教科書がいかに先達によって熟読されたかを紹介している。*National Readers* の人気の秘密の一端は、『解題』の著者の次のことばにある——、「第五読本は四八〇ページ。内容はディケンズ、スコット、ラスキン、クーパー、アーヴィングなど大家の文章が多く、九九課もある。英詩も百篇あり、テニスン、ロングフェロー、ポーなどや、グレイのエレジーも出ている。第八課のホーソン「ベンジャミンウェスト」は *Biographical Stories* から採ったもの。第一二課「月光の曲」は美しい一篇で、小学国語本巻一二に採られている。第二一課「皇帝の新しい服」はアンデルセンの童話。第三〇課はトーマス・ヒューズの *Tom Brown's School-Days* から採っている」。

まるで「古き良き時代」の英文学科の必読書を並べられているという趣きだ。19世紀の英米の子供達はこういう読物に親しんでいたのであり、そのようにして文化は引き継がれてきたのである。百篇におよぶ詩は、metaphors（たとえば、Apostrophe）、metonymy、elocutionary climax など、伝統的な修辞法を一通り身に付けることができるように配慮され

ている。ここに採られている寓話、冒険談、歴史、人物伝（成功物語）動・植物に関するものなど、あらゆるジャンルの物語に通底する特徴の一つは、その story telling の妙味にある。当時の日本の学習者をして熟読させたのもそれだった。文学作品は何はともあれ読んで面白くなければならない、という趣旨のことをいったのは W. S. モーム（1874 - 1965）であるが、ここに採られた物語は、例外なく読ませるように仕掛けられている。これが英米文学の初歩的で伝統的そして何よりも正統の読物であるといつてよかろう。

アングロ・サクソン文化の古層としてのマザー・グースもふんだんに出てくる。それもしばしばパロディーの形式で。

This is the ship, that Jack built.

This is the sail, that moves the ship that Jack built.

This is the mast, so strong and new, that holds the sail, that moves the ship, that Jack built.

（以下略）

こうして語り継がれた物語や唄とその語りの方に当時の学習者は新しい世界を見る思いであったろう。 *National Readers* は、良くも悪しくも徹頭徹尾アングロ・サクソンそのものだったのである。そのような伝統的で正統とされる（主として19世紀以降の）英文学にどのような問題があるのかを読み解いてくれたのは E. サイド（大橋洋一郎訳）『文化と帝国主義 I』みすず書房、1998 [*Culture and Imperialism*, 1993] である。 *National Readers* にも19世紀という帝国の時代にふさわしい題材が並んでいる。その中の一つが旧植民地への旅行とそこでの経験である。ついでながら、岩竹は、18・19世紀の旅行記（風俗記、風土記）が人類学の初期の段階だとしている¹⁹⁾。

そうした物語に共通するのは、白人（多くの場合イギリス人）が（場合によっては家族と共に）「原住民」を servant として連れて野生動物で危険極まりない植民地（しばしばインドや南アフリカ）を旅行し、間一髪危険から逃れることができたという構造である。そこに登場するイギリス人はしばしば a gentleman や a traveller（場合によっては、an English girl— [*Globe Reader*, Book 3, p. 60]）の呼称で導入される。 a gentleman が na-

tive (s) を servant として employ して旅行を楽しむという構図は、植民地主義（状況）そのものである。それこそが英米の植民地支配の基層を形成してきた。ロビンソン・クルーソーとフライデーの会話を、英語植民地主義言説の第1号と規定するのは R. Phillipson と A. Pennycook である。その「クルーソー」は、戦後に至っても採られるほど人気があった。熊本謙二郎の *New English Drill Books* (Series 1 - 5, 1907) には、ごていねいに二度にわたって、（つまり低学年で一度、高学年で一度）登場する。この物語がいかに人気があったか想像に難くない。そうした物語を熱気をもって読んだ多くの日本の知識人の卵が、やがて同じような植民地主義者としてふるまうことになったのも当然といえば当然だった。たとえば、戦争中に使われた3年生用の『英語』には、「原住民はかれを自分たちの指導者として尊敬した」が和文英訳の問題として出てくる。

それはそれとして、*National Readers* が熟読され、それが以後の英語教科書に大きな影響を与えてきたのは、*National Readers* を支えた「倫理観」や「道徳観」と日本人読者の「道徳観」の間にある種の共通項があったからである。言い換えれば、アングロ・サクソン文化のエートスを筒井や古川の説明モデルで日本人読者は読み替えたのである。*National Readers* に一貫する倫理観はキリスト教精神であり、清教徒主義である。そこから導き出される実践的処世訓は、神に近付くために、人は「全力をあげて「修養」しそして勤労に励まなければならない」のである。キリスト教を儒教や武士道で読み替えた日本人の倫理観は「求道倫理観」（その世俗的用語が「根性」「ガンバル」「いっしょうけんめい」「ひたむきに」である）とでも呼べるもので、「道」を究めることにその本質があった。日本人にとって、「求道」的と「全力」的はほとんど同義的なのである。この求道イデオロギーは、今日「感動的教材」ということばによって引き継がれている。しかしながら、「読み替え」はあくまで自分の側に相手を引き寄せる手段であって、それによって相手の本質をきちんと認識できるわけではない。かくして *National Readers* に一貫するキリスト教精神の本質は、大局的にみて日本文化の中に根付かなかつたし、その本質を十分理解できたかどうかも疑問である（「神」を持たない日本人を悲慘とみるかどうかは別問題としてもである〔遠藤周作『白い人・黄色い人』〕）。*National Readers* は、19世紀の中葉という、（想像の）共同体

である国家をもっとも意識した時期の出版物である。国民の統合は、国力の増強に不可欠の要件であった。そこで教育制度が整備され国策に組み込まれたのだった。*National Readers* がアングロ・サクソンの優秀性を賛美し、勤勉であることを勧めたのは当然だった。そしてそれはそのまま（近代化をいそぐ）明治国家の国策とも奇妙に一致したのである。Book 2 (p. 61) には、“The Idle Boy” という課がある。少年（こうした場合、少女はほとんど登場しないことに注意）は、自分が「不勉強」であったために先生から次のようにさとされる——。

‘Boys’, said he, ‘you must not be idle. You must keep your eyes on your lessons. You do not know what you lose by being idle....’ (p. 67)

ジョージ・ワシントンは、「決してウソをつかなかった」人間として採り上げられていて、その課のすぐ後には ‘Never Tell a Lie’ の唄が載せられている (Book 2, p. 80)。何事によらず全力を尽すことが大切であると説く唄 (‘Do your best’) も登場する——。No matter what you try to do, /At home or at your school, /Always do your best—/There is no better rule. である。If you can not speak well of your friends, do not speak of them at all. (Book 2, p. 108) といった普遍的な箴言もある。There’s nothing like mamma’s kisses/For her own, little, baby boy. (Book 2, p. 117) は、「母親の男の子に対する」愛情を唄ったものである。男の子が主役で女の子が片隅に追いやられているのも明治時代の社会状況とそっくりである。Book 5 (p. 58) に登場する「人は何のために生きるのか」(‘What I live for’) という唄には the heaven と God が出てくる——。I live for those who love me, /Whose hearts are kind and true ; /For the heaven that smiles above me, /And awaits my spirit too ; /For all human ties that bind me, For the task by God assigned me, /For the hopes not left behind me, /And the good that I can do. キリスト教国の典型的な唄の一つである。ここでも日本の読者は、汎神論的意味合いの「おてんとうさま」「てん」「かみさま」などの用語で読み替えたに違いない²⁰⁾。Our country ! ’tis a glorious land ! (Book 5, p. 126) で始まる愛国的な唄も、皇国日本を愛する精神に読み替えられたに違いない。岡倉由三郎の *Globe Reader* (Book 4, p. 37) には Hagan の唄 Onward! On-

ward! が載っている。最後のスタンザは次のような調子である——。

Onward, onward, onward, ever! /Human progress none may stay; /All who make the vain endeavour, /Shall like chaff be swept away. 近代化をせきたてるこの唄のイデオロギーは、1960年代の経済の高度成長政策と、下っては今日の「IT 革命」というスローガンに忠実に引き継がれている。「近代化」が日本にとってなんだったのかをきちんと問い直すこともしないままにである。つまり、ほとんどの読物が違和感がないままに読まれたのである。熟読されるのにはそれだけの理由があったのである。National Readers は、アメリカ人の Charles J. Barnes によって作成されたものだが、ここで論じた「求道的倫理観」を土台にした題材は、編者が日本人になってからも引き継がれた。たとえば、増田藤之助：The International Readers の“The Power of Conscience” “Modesty” “I want to be a man”，津田梅子・熊本謙二郎：Girls' New Taisho Readers (1921) の“Don'ts for Girls”，竹原常太：The Standard English Readers (1932) の“Health”（「帝国日本を支えるのは何よりも若い諸君の健康にかかっている」という声が聞こえてくる）などである。ラジオ体操や運動会も国策の中で発想されたものであり、「健康」思想や衛生思想は国策を支え今日まで生き延びている。

（本稿は、主として『萬国史』から Jack and Betty までのおよそ半世紀におよぶ英語教科書の特性を分析し、併せて「英学史」方法論の再考を目指したものである。第二次大戦以後の半世紀は、その前の半世紀の間に固定化された英語イデオロギーによって規定されている。したがって、前半の半世紀をどう見るかは極めて重要である。筆者は、1 世紀におよぶ英語教科書史は、本質的なところで変わっていないという立場をとっているが、後半の半世紀が、言語権、多文化主義、多言語主義が叫ばれている中で、そして英語が「世界語」「地球語」として当然視される中で、英語教科書には何の問題もないのだということがなかば常識化している点に鋭い批判の眼を向ける必要があると考える。実際には、英語教科書の新しい植民地主義が、「平和」「人権」「言語権」「多文化主義」（大学では「コンピュータ リタラシー」の名の下に深く静かに浸透している。本稿の(2)では、そこを詳述する予定である。）

〔注〕

- 1) この『選集』は、教科書研究の上で今後貴重な資料となるだろう。大い

に利用されることを願っている。ただし、監修者の教科書観は筆者のそれとは違う。その点を明確にし、教科書批評の方向性に一石を投ずるのが本稿の目的の一つである。ついでながら、収録されている教科書の一覧を以下に転載しておく――。

『英語教科書名著選集』第1期収録一覧

巻	書名	著者	原発行	発行年
第1巻	Parley's Universal History	Samuel Griswold Goodrich	Iverson, Blakeman, Taylor & Co.	1875年 初版1837年
第2巻	Willson's Readers	Narcisus Willson	Harper & Brothers	1860年
第3巻	Union Readers	Charles Walton Sanders	Iverson, Blakeman, Taylor & Co.	1863年
第4巻	Mitchell's New School Geography	S. Augustus Mitchell	E. H. Butler & Co.	1872年
第5巻	National Readers - 1・2・3 -	Charles J. Barnes	A. S. Barnes & Co.	①②1883年 ③1884年
第6巻	National Readers - 4 -	Charles J. Barnes	A. S. Barnes & Co.	1884年
第7巻	National Readers - 5 -	Charles J. Barnes	A. S. Barnes & Co.	1884年
第8巻	English Readers: The High School Series - 1・2 -	Walter Denning	文部省編輯局	1887年
第9巻	English Readers: The High School Series - 3・4 -	Walter Denning	文部省編輯局	1887年
第10巻	English Readers: The High School Series - 5・6 -	Walter Denning	文部省編輯局	1887年

『英語教科書名著選集』第2期収録一覧

巻	書名	著者	原発行	発行年
第11巻	正則文部省英語読本 - 1・2・3 -	文部省編	文部省編輯局	1889年
第12巻	正則文部省英語読本 - 4・5 -	文部省編	文部省編輯局	1889年
第13巻	The Globe Readers - 1・2・3 -	岡倉由三郎	大日本図書	1907年
第14巻	The Globe Readers - 4・5 -	岡倉由三郎	大日本図書	1907年
第15巻	New English Drill Books - 1・2・3 -	熊本謙二郎	開成館	1907年
第16巻	New English Drill Books - 4・5 -	熊本謙二郎	開成館	1907年
第17巻	The International Readers - 1・2・3 -	増田藤之助	丸善	1915年
第18巻	The International Readers - 4・5 -	増田藤之助	丸善	1915年
第19巻	Kanda's Crown Readers - 1・2・3 -	神田乃武	三省堂	1916年
第20巻	Kanda's Crown Readers - 4・5 -	神田乃武	三省堂	1916年

『英語教科書名著選集』第3期収録一覧

巻	書名	編著者	原発行	発行年
第21巻	Girl's New Taisho Readers - 1・2・3 -	津田梅子・熊本謙二郎	開成館	1921年
第22巻	Girl's New Taisho Readers - 4・5 -	津田梅子・熊本謙二郎	開成館	1921年
第23巻	The Standard English Readers - 1・2・3 -	竹原常太	大修館	1932年
第24巻	The Standard English Readers - 4・5 -	竹原常太	大修館	1932年
第25巻	英語-中学校用-	青木常雄・寺西武夫	中等学校教科書株式会社	①②1944年 ③1945年
第26巻	Let's Learn English	文部省編	教育図書株式会社	1947年
第27巻	The World Through English		中等学校教科書株式会社	①②③ 1948年 ④⑤1947年
第28巻	The Road to English		中等学校教科書株式会社	1947年
第29巻	Jack and Betty: English Step by Step	萩原恭平・稲村松雄 ・竹沢啓一郎	開隆堂	1948年
別巻	英語教科書の歴史と 解題	高梨健吉・出来成訓		1993年

- 2) Pierre Bourdieu: *Language & Symbolic Power*, Polity Power, 1991の序文で、John B. Thompson は次のようにいう——, On a given linguistic market, some products are valued more highly than others; and part of the practical competence of speakers is to know how, and to be able, to produce expressions which are highly valued on the markets concerned. (p. 18)。ここでいう products は languages の比喩である。すべての英語教科書の直輸入という状況は、商品としての英語の価値が市場経済において日本語の価値よりも圧倒的に上だったことを示している。この状況は現在も変わらない。なお、Bourdieu の分析の枠組は、「言語資本」論 (linguistic capital) である。これだけなら言語貨幣論として昔から唱えられてきたことで新しい議論ではない。たとえば、英語と英貨 (ポンド) の威力に喩え、青年達に英語の習得の必要性を説いたのは和田垣謙三であった。Bourdieu の「言語資本」論の新鮮さは、公用語、国家語あるいは英語などの大言語の社会的特性を capital をキーワードにして精密に読み解いてみせたところにある。社会的な大言語が規範となった時に何が起るか。彼はいう——, Ignorance is no excuse; this linguistic law has its body of jurists — the grammarians — and its agents of regulation and imposition — the teachers — who are empowered universally to subject the linguistic performance of speaking subjects to examination and to the legal sanction of academic qualification. (p. 45)。言語研究の専門家や言語教育者は、その言語の「秘儀」に参入できる権力者であり、彼等の権力 (Bourdieu の用語を使うと symbolic power (or capital)) は、その言語の economic capital の力に正比例する。英語教科書の直輸入という状況下では、英語の economic capital の威

力だけではなく、それに伴う symbolic capital (たとえば、その言語の使い手の社会文化的威光) も増える。社会文化的威光が輝きを増せば、経済的利益が増える。こうした再生産の象徴的存在が英語試験の世界基準として君臨する TOEFL や TOIC、である。

- 3) 『英語青年』(研究社, 2000年9月号) 他, 多数。
- 4) 清水義範の『永遠のジャック & ベティ』(講談社, 1988) は, 教科書の中の白人の英語をあまりに熱心に勉強したため, 20年後に再会した男女が突然, 「それはなんですか」「それはリングです」式の日本語しか出てこなくなった状況を *Jack and Betty* のある種のパロディーとして書いているのだが, このパロディーは, 日本語の幼稚化と白い肌の人間の話す英語の盲目的習得との相関関係を言い当てている。
- 5) 「文部省によると, 大学や大学院で学ぶ留学生は, 米国には四十九万人, 英国に二十一万, ドイツ二十五万人, フランスに十四万人いる。」(『朝日新聞』2000年8月20付朝刊) ここでいう「留学生」は途上国からの留学生のことである。日本では現在五万六千人が学んでいるという。同紙によれば, 外務省が五年後には年間一万人の受け入れを目指す, という。その目的は, 「人材育成を通じてアジアでの影響力を高め」ることであり, 「将来の日本の労働力不足を補うことも念頭においている」と同紙は伝えている。なんのことはない, 平成版大東亜共栄圏政策なのである。「先進国」(とりわけアメリカ) が莫大な資金を海外援助の一環として留学制度につき込むのは, それが結局国益のためになるのだということを経験的に学んできたからであり, 同時に, それに応ずる留学希望者が多数いるということは, 留学する側にもそれなりのメリットがあるからである。TOEFL で何点とった, などと浮かれている場合ではない。
- 6) ① F. G. ノートヘルファー (飛鳥井雅道訳) 『アメリカのサムライ』法政大学出版局, 1991。この本は, お雇い外国人として明治初期に日本にやってきた一人のアメリカ人の生涯を, 文化的文脈の中で捉えようとしたもので, お雇い外国人が日本の近代化とどのような関係にあったのかを示す一級の研究書であると思う。② 平川祐弘「植民地化・キリスト教化・文明開化」(『諸君!』文藝春秋, 2000年9月号)。
- 7) お雇い外国人の給料が日本人のものと比べてどの程度のものであったかを示す貴重な資料がある。『東京の英学』(『東京都史紀要』第16, 1959) には次の一節がある——, 「明治政府は, あらゆる分野にわたって外国人を雇用し, 莫大な給料を与えたことは, 明治五年三月の「御雇外国人一覧」にみられるとおりである」(p. 91)。「文部省顧問としてまねかれた D. モーレーの700円は別格として, 東京大学では, ビーター・ウエーダーが350円, ホレーウス・ウィルソンが250円」とある (p. 92)。明治五年 (1872) に東京府に出された勸学義塾の開学願書によると, 教師の給料は次ようになっていた——。外国人教師のランベルトが一月百五十円, イザークスが七十五円, 語学通弁の杉浦正修は十円。変則教員の給料は, 三人の教師についてそれぞれ, 三十五円, 十七円, 十円となっている

(p. 232)。明治二十八年(1895)夏目漱石は、松山中学の教員として赴任した。その時の漱石の月給は八十円で、校長の月給(六十円)をうわまわった。その理由は、アメリカ人教師C. ジョンソンの後任だったからだといわれている(川島幸希『英語教師夏目漱石』新潮選書、2000年、p. 141)。にもかかわらず、お雇い外国人の中には相当ひどいのがいて、『東京の英学』には、「英国人とはいえ教育程度が低く、ただ英國人だといっただけで教員になっていたといってもよいくらいだ」(p. 168)、「総じて専門教育を受けたほどの教師はきわめて稀であったようである」、「ただ外国人であるという理由だけで採用されたものが多かった(以上 p. 171)」のような記述もある。状況は今日に至っても本質的に変わっていない。

- 8) 「失敗だった」は、現場教師に見向きもされなかったという意味で政治的に失敗したのであって、絶対的な意味での「失敗」ではない。むしろ、アングロ・サクソン中心主義によって作成された教科書(戦中のものも例外ではない)が、日本人の精神を「植民地化」するのに大きな役割を果たしたことを考えると、森以後の教科書こそ失敗だったというべきだろう。川島幸希も「西洋の文物吸収を英語学習の大きな目的としていた明治日本では、この欠点は致命的なものだった」(『英語教師夏目漱石』p. 81)と書いている。実に安易な批評というべきだ。一方で「西洋癖」として叩かれたほどの「西洋通」でもあった森が、何故アングロサクソンから距離をおいた教科書を作ったのか。外交官だった森はどういう教科書を作れば受け入れられるかぐらいのことは百も承知だったはずだ。その時の森は、そうした目先の政治的思惑とは別に国家百年の計を頭に描いていたのではなかったか。アングロ・サクソンに近付き過ぎず、なおかつそれを拒否しないで「飼ひ馴らす」方法(筆者はそれを空洞化 [disempowering / accomodating] 理論と呼ぶ)を考えていたのではなかったかと思う。森の実験を単なる「失敗」としてかえり見ないのは、歴史から何も学ばないことになる。
- 9) ここでは「ディスコース」と同義的に使っている。ディスコースを岩竹美加子は、「ある事象や対象について考えたり、語ったり、表象したりする方法や枠組みを指す。それは、事象や対象についての社会的知識を産み出すが、それは知識にとどまらず、さらに、社会的実践や行動に多大な影響を及ぼす」と定義している。(『民俗学の政治性』未来社、1996、p. 57)教科書の題材とその展開の方法はまぎれもなくディスコースの一つなのである。ディスコースが社会的知識を産み出すとすれば、その形成過程と題材とその記述の仕方に内在する政治的意味を問い直すことは、教科書批評の上では避けては通れないはずだ。
- 10) *English and the Discourses of Colonialism*, Routledge, 1998. Pennycook の「植民地言説」分析のキーワードは、linguistic-discursive connections (p. 4)、つまり「言語と言説の相関性」であり、その特性の一つは、reformulations and revaluations, remade, rewritten, recontextualized (pp. 6~7) (「表象の仕方が変わっても、本質は再生産され続けている」)である。
- 11) Probal Dasgupta: *The Otherness of English*, Sage Publications, 1993.

- 12) 「(アメリカにおける)人種問題は「白人にとっては恥の源泉」と書いたのは、『黒い憂鬱』(李隆訳、五月書房、1994)の著者シェルビー・ステイルである(同書 p. 69)。著者は、この白人の恥の意識と黒人の人種的不安感が交差するところにアメリカ特有の人種問題が存在すると説く。そうした人種問題を解決するためには、黒人を白人の単なる被害者と位置付けるのではなく、黒人自身が自らの「劣等感」と真正面から向き合うしかない。「アフリカ系アメリカ人」などと言い換えるのは、「黒人がアメリカの現状に感じる懐疑を解消する手段になり(中略)自己を見据えた上で人種の脆さと対峙しようとする要素はない」(p. 101)とも述べている。こうした複雑な人種問題の創出に大きな役割を果たしたのが、「主流社会の象徴」たる「学校」(p. 105)で使われた教科書であった。『萬国史』を代表とする英語教科書の黒人へのまなざしが、日本人の学習者の「黒人観」をも決定したのである。石川好は『黒い憂鬱』に寄せた解説文の中で、白人の黒人観が「今日の在日韓国人や不法就労外国人を見るわれわれ日本人にも影響を与えている」と書いている。その通りだと思う。
- 13) David Spurr の *The Rhetoric of Empire* (Duke University Press, 1999) は、帝国主義を正当化する視点をジャーナリズムの記事や旅行記を基に、① Surveillance ② Appropriation ③ Aestheticization ④ Classification ⑤ Debasement ⑥ Negation ⑦ Affirmation ⑧ Idealization ⑨ Insubstantialization ⑩ Naturalization ⑪ Eroticization の11の概念に分けた。①について著者は次のようにいう——, Reporting begins with looking. Visual observation is the essence of the reporter's function as a witness. But the gaze upon which the journalist so faithfully relies for knowledge marks an exclusion as well as a privilege: the privilege of inspecting, of examining, of looking at, by its nature excludes the journalist from the human reality constituted as the object of observation, (p. 13)。
- 14) 岩竹美加子『民俗学の政治性』(未来社、1996, p. 17)。
- 15) フランツ・ファノン(海老坂武・加藤晴久訳)『黒い皮膚・白い仮面』(みすず書房、1981 [特に第1章「黒人と言語」])。彼はいう——「アンティル諸島の黒人は、フランス語を自分の国語とすればするだけ、より一層白人に近くなる、言いかえればより一層本当の人間に近づいていく」。
- 16) Bernard S. Cohn は、*Colonialism and its forms of knowledge* [The British in India] (Princeton University Press, 1996) の第5章 [Cloth, Clothes, and Colonialism: India in the Nineteenth Century] で、服装が「植民地主義」と「反植民地主義」の歴史の一部を形成していることをおよそ60頁を割いて論じている。この教科書のイギリス女性の服装と黒人女性の服装(つまり、表象)をみると、それだけで両者の関係の非相互性が明らかになる。
- 17) 「教養主義」の日本の特徴である「修養主義」は、河合榮治郎(編)『学生と読書』(1938)、阿部次郎『人格主義』(1922)などに具体的な形をとって表われているが、それとは別に、知識(それも西洋の)を豊かにすることも「教養主義」の一つ重要な側面であった。それが高じると、シェー

クスピアの作品に登場する草花を自分の庭に植えて楽しむといったマニア (Anglo-mania) が生まれる。この種のマニアもまた英文学・語学・英語教育のテクノクラート (R. Phillipson のことばを使えば professionalism) を産み出し今日に至っている。彼等自身は、意識してはいないだろうが、結果として英語帝国主義 (状況) に手を貸しているという状況はここ 1 世紀の間少しも変わらない。もう一つ大切なことは、テクノクラートにとっての「教養主義」は、ほとんどの場合活字 (書きコトバ) を通して獲得を目指したものである。外国語習得の中の (今日まで続く) 「音声」蔑視の根は一つにはそこにあったと思われる。

- 18) 司馬遼太郎・ドナルド・キーン『日本人と日本文化』岩波新書、1972 (初版) (特に第五章日本人のモラル——儒教をめぐる) を参照。なお、日本人の生き方を規定したものとして儒教を挙げているものに、三枝博音『西欧化日本の研究』(中央公論社、1958, p. 147) がある。
- 19) 岩竹美加子『民俗学の政治性』(未来社、1996, p. 15)。
- 20) ① God と「神」の文化意味論上の差異と「神」という訳語の形成過程については、柳父章『ゴッドと上帝』筑摩書房、1986を参照のこと。②本木正栄他『諸厄利亜語林大成』(1814) は、「天の神と地の神」(諸橋の『大漢和辞典』第八卷) を意味する「神祇」を訳語として与えている。